



豊かな人間社会の構築に貢献することを目指して

附属図書館長 佐々木 丞平

京都大学附属図書館は1899年（明治32年）の設立以来、昨年11月で創立百周年を迎えた。その間、建物は三度建て替えられ、バックナンバーセンターの開設、CD-ROMサービスやオンラインによるカタログ検索システムであるOPACの運用等を開始する一方、閲覧席を増設し、付設設備を充実させるなど、様々な努力が積み重ねられた。それと共に新たに宇治キャンパスに宇治分館も設置される等、新たなニーズに対応して今日に至っている。

2000年の現在、計82万冊（京都大学全体で574万冊）の蔵書や、電子図書館システムの画像データを資料として提供し、資料保存のための目配りと、また利用者にとって利用しやすいシステム、機能を常に考え、更には52の学内の図書館（室）間の相互協力や連携の調整機能を担っている。

本附属図書館は、総務課、情報管理課、情報サービス課、合計10掛の60名に近い職員が、こうした情報管理、サービスに取り組んでいる。今まで図書館を利用するだけの立場であった私にとっては、図書館がこのように様々な分野の方達の大変な努力によって機能していることを知り、驚きに近いものを感じているのであるが、まず多くの利用される皆様にもこのことを理解

していただきたいと考えている。これらの課が力を合わせ、うまく機能して初めて利用者にとってより使いやすく、意義のある教育研究の支援体制ができるのであり、一同一丸となって努力していきたいと考えている。

当館は、時代と共に必要とされる情報の分野や、質、量が刻々と変化して行くことに対応をしていく一方、貴重な記録物を保管管理するという重要な役目も担っている。

また近年、図書館のあり方として模索されていることの一つに、学内への情報提供のみならず、広く外部へのサービス提供という問題がある。外部への貢献に関しても検討していかなくてはならない。これは一方では学術の発展に貢献するという意味で大変意義深いことであるが、一方では部外者の侵入による事件も発生しており、様々な事項を検討して慎重に進めて行かねばならないことである。

さて、現在のように有り余る情報が収集できる時代になると、今までには想定されていなかった新しい種類の問題が浮上してくる。その第一点は情報の整合性と質である。テレビのニュ



ースのように一刻も早く、より多くの情報を提供しようと性急になる余り、中には誤報やニュースの違う情報伝達も起きている。

一つの情報が大変な時間をかけて伝達される時代から、瞬時の情報収集伝達が可能になったことは誠にありがたいことである。しかしこのように、急ぐあまりに情報確認をなおざりにするような、基本的確認事項の不徹底という、従来は手抜きをされなかった部分が却って希薄になるという不安が生じている。

発展する情報収集網とデータ量の拡大は、良い面を持つ一方、玉石混淆の情報から正しい情報を選択し淘汰しなければならないという、情報を必要とする側にとっては、以前よりも却って手間のかかる事態が起きていることもまた事実である。そしてこの情報淘汰の時に、情報を必要とする側の篩にかける力量そのものが問われる時代になっており、このこともまた、万人が整合性のある情報を手に入れられるわけでは無いという問題を含んでいる。

時代が変化することによって、このように情報収集、伝達、情報選択、という流れの中に含まれる問題点は刻々と変化をしている。私自身は絵画史の研究に身を置き、古文書の和綴の手書き本や版本類を解読し、一方では、何十万件という絵画作品の資料をデータベース化してコンピュータで制御している。極めて古い情報入手法と現代的な検索との両面が私の研究分野の範疇にあるが、その両方がうまく機能して初めて私の研究分野は成り立っている。恐らく多かれ少なかれ図書やデータ検索による情報取得をする場合、新旧両面がどの研究分野においても必要なものといってよいであろう。

特に私の研究分野では古いものを扱うため、古文書の登場は頻繁であるが、ここで奇妙なことに気付かされた。古文書の記述というのは極めてシンプルで素っ気ないものであるが、それが書かれた当時においては詳細に説明を付せずとも理解されるものであったからであろう。しかし、現代において研究をする立場としては、

その一行一句に様々な事項を想定し、考察をすすめるなくてはならない。誠に手の掛かるものであるが、この過程で研究のヒントになる事柄を知り得たり、研究を進める方向を見定めることができたりもし、少ない情報ながら、それを生かした研究が構築されていく。

一方、最新のデータベースは大変に機能的になってはいるものの、目的物だけの検索が起こるため、寄り道も迷い道も無い。あるものを探そうとして少しでもそれと異なれば、「無い」という事実が帰ってきて、実は探していたものと極めて近いものがあったとしても情報として入手できない場合がある。どう違っているのか、それを最初から仮定できていれば、そのような検索もできるであろうが、そのアイデアの無いときには、ほんの少しの差異であっても、その差異までを含めて検索を掛けることはなかなか難しい。

シンプルな一行から手探りであれやこれやと調べていく過程と、様々な調べたい事項を一端検索に掛けてしまえば、豊富な情報の中から抽出されて出てくる便利な方法と、一体どちらが良いのか。情報を取得する側がよくよく考えてみないことには、遠回りな道も、行き止まりの道も、様々に内包されているわけである。早いことがイコール早く理解できるということにはならない落とし穴も生じている。

最新の電子技術の発達には大いに期待を寄せている者ではあるが、一方で、このような最新のシステムの盲点に関して細心の注意を払うことが必要になってくるであろう。情報管理収集のモラルという問題もある。

また、こうした最新システムの生む歪みとして、最近マスコミを賑わしている問題に少年犯罪がある。テレビゲームで育った年齢層の抱える問題として、感情を持たないコンピュータを相手のやりとりしか人生経験がない少年が増えているようである。対人間であれば、自分の提示した問題が相手に不利益や不快な感情を与えるものであれば、当然それに対するリアクショ

ンが返ってくる。あるいは、相手を喜ばすことを提示すれば当然それに対する相手の好意的な対応が返ってくる。

しかし、感情を持たない機械であるテレビゲームを相手にしている世代、コンピュータ相手のやりとりしか経験しない状態では、相手からのリアクションを読むという経験の蓄積が希薄になる。相手を傷つけようが、不利益を与えようが、自身で気付くこともできない。情報提供という合理的な一面と共に、こうした人間教育、育成の上で持つ最新システムの問題点についてもこれからは活発な論議と研究が必要になってくるであろう。

人類が情報に振り回されるのではなく、豊かな人間社会の構築に役立ってこそ、情報の役割が達成できるのである。多様化する情報に対し、どのように提供サービスを対応させていくか、急激な情報技術革命にどのように対応していくか、また他の諸機関に対し、図書館がどのように連関して機能していくのか、これから未来に向けて構築すべきことは山積みである。豊かな人間社会の構築、そして教育研究の支援を目指し、京都大学附属図書館は邁進していきたいと願っており、広く皆様のご協力ご支援をお願いする次第である。

(ささき じょうへい)

附属図書館宇治分館の設置にあたって

宇治分館長 杉浦幸雄

宇治地区の五研究所共通図書室が「国立大学の附属図書館に置く分館を定める訓令」の一部改正により、4月1日付けで附属図書館宇治分館として新たにスタートした。

本学では、「調整された分散方式」のもとに附属図書館と51におよぶ図書室から構成されていると聞いている。大学図書館が中央集中方式をとるか、分散方式をとるかは、議論の分かれるところであるが、宇治地区の五研究所共通図書室（化学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、食糧科学研究所、防災研究所）の歴史を見ると、30年前に宇治キャンパスに集まる自然科学系の各研究所が有機的に連携し研究支援となる五研究所の共通図書室を創設し集中方式をとっている。当時の考えは、本学にとって先駆的な出来事であり、高く評価されている。この当時のことを本誌附属図書館報「静脩」Vol.8, No.4 (1972.2)の巻頭文で当時の葛西善三郎食糧科学研究所教授は、「一昨年、研究所が宇治地区へ移転することになり、五研究所でこれらの雑誌が同じ図書館に保管、陳列されることになったのを機に、かなりの整理が行われた。

重複をさけ、無駄をはぶき、それぞれの研究所が独自の特色のあるものを分担して重点的に揃えることになった。経費は節約され、利用は効率的になり、保管は合理化された。新着雑誌がズラリと並べられているのは壮观である。」と五研究所共通図書室のことを評価されている。



このように先駆けて集中方式をとった五研究所共通図書室も本年で30年の節目を迎え、新しい世紀を目前に五研究所共通図書室から発展移行するため、本学では初めて文部省訓令に定める分館として制定していただいた次第である。

附属図書館宇治分館としてスタートしたが、運営にはきびしいものがある。本学では分散方式が長く続いているため、図書室の運営は部局で賄うことが伝統になっている。宇治キャンパスには自然科学系の各部局（化学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、食糧科学研究所、防災研究所、宙空電波科学研究セン